

書評

山根明大著

『コモンウェルスの政治思想史—エリザベス一世期の政治的イングランド意識』

(立教大学出版会、二〇一七年)

小林 麻衣子

本書は、汎ヨーロッパ的な中世キリスト教共同体あるいは普遍的な理想国家を意味した「コモンウェルス」意識が、エリザベス一世期にイングランドの「コモンウェルス」のための政治参加の意識（＝政治的イングランド意識）へと形成・発展・急進化していく過程を考察している。著者は、歴史的文脈を重視しながら同時代に出版された多様なテクストの言説分析を行い、コモンウェルスという概念・言語を諸々の社会の中で検証し、イングランド社会全体を描き出そうと試みている。以下、本書の概要を示す。

序章では、M・ペルトネン著 *Classical Humanism and Republicanism in English Political Thought, 1570-*

1640, Cambridge univ. press, 1995（以下『古典的人文主義』）、P・コリンソンの「君主政共和国」に関する論文、論文集『初期近代イングランドの君主政共和国』を中心に先行研究を簡潔に整理し、先行研究の問題点を以下三点挙げる。①古典的ヒューマニズム偏重の故の（普遍的な理想国家における「活動的市民」といった）抽象的な道徳論への傾向、②エリザベス期の宮廷外の政治的領域に関する考察の不足、③エリザベス期の「リパブリカニズム」の極度の単純化である（七―八頁）。これらの問題点に対して、本書は以下の構成を用いて克服しようと試みている。

第一章では、エリザベス期イングランドの時代背景について概観している。第二章では、政治的イングランド意識の思想的要素として、古典的ヒューマニズム、プロテスタントイデオロギ、コモン・ローの政治的言説について説明している。第三章から第五章まではエリザベス治世期における政治的イングランド意識について、形成（前期…一五五八―一七〇年頃）、発展（中期…一五七〇、八〇年代）、急進化（後期…一五九〇年頃―一六〇三年）と三段階に分け考察している。第三章では、『説教集』、ジョン・ジュウエル『イングランド国教会の弁明』、『為政者の鑑』の作品に王権・国教会に対する臣民の服従を促すイングランド意識が見出されることを示した。一方、ニコラス・ベイコン及びトマス・ス

ミスの言説から宮廷のプロテスタント人文主義者に政治的イングランド意識が形成されていったと分析し、彼らが議会を通じた臣民の政治参加の必要性を説いていたことを明らかにした。

第四章では、政治的イングランド意識が、議会（下院議員ピータ・ウェントワースの議会演説『ジョン・フッカー』『事規則と慣行』）、地方都市（ジョン・バーストン『社会の保全』、「公共圏」〔ジョン・スタップズ『亡国論』〕という宮廷外の政治的領域へ普及・拡大したと論じている。

第五章では、政治的イングランド意識が見られた空間ではなく、意識の本身そのものが考察対象となり、宮廷と関係の強いタキトウス主義者（エセックス・サークル、ジョン・ヘイワード『ヘンリ四世史』、フランシス・ペイコン『ペイコンの弁明』）、宮廷外の政治的領域にいるコモンローヤー（ウィリアム・フルベック『法学研究のための心得あるいは準備』）、宮廷外の政治的領域にいるピューリタン（「マープレリト書簡」）の史料をもとに、王権あるいは国教会に対する権力批判が見られたことを根拠に、政治的イングランド意識が急進化したと結論づける。

本書の特徴は、先行研究が簡潔に整理され、多様な一次史料が作者の経歴等の説明とともに歴史的文脈の中に位置付けられ概ね丁寧に分析されている点にある。全体的に簡

潔な論述により、著者の主張や論理展開が明瞭である。本書の論旨をまとめると、次のようになる。政治的イングランド意識は時系列に形成され、国レベルから地方都市や公圏など多様な歴史的空間の中へと社会的に拡大して発展し、その意識の本身が王権あるいは国教会という権力批判と結びつき急進化した。しかしながら、本書の特徴であるこうした簡潔な整理方法が逆に論証の幅を狭めており、この点が本書の今後の課題といえる。

ここでは著者が挙げた先行研究の問題点三点に対し、その整理方法の適切性含めて本書が試みた論証のあり方について評する。

問題点①古典的ヒューマニズム偏重の故の（普遍的な理想国家における「活動的市民」といった）抽象的な道徳論への傾向について、本書はコリンソン及びペルトネンの研究に対する問題点として指摘する。同様に、問題点②エリザベス期の宮廷外の政治的領域に関する考察の不足についても、本書は宮廷とその外部を区別したペルトネンの研究を評価する一方、同書が「初期ステュアート朝に偏っており、必ずしもエリザベス期の「リパブリカニズム」を解明したとは言えない」（七頁）と批判する。確かに、著者が指摘する通り、ペルトネンの『古典的人文主義』は本書よりも長い時間空間を扱っており、エリザベス期については

一つの章でしかない。しかし、評者には本書がペルトネンの研究に強い影響を受けていると映り、本書は①及び②の問題点を十分克服できていないといえる。

本書第四章は、著者の言う宮廷外の政治的イングラント意識について考察した箇所である。確かに、本書同章第一節は、ペルトネンの先行研究よりも、下院議員（ピーター・ウエントワース、ジョン・フッカー）の言説を歴史的文脈に位置付けてより丁寧な分析をしている。その一方で、ペルトネンの『古典的人文主義』は、本書が触れていない他の史料やアイルランドの議論にも目を配っていることを付言しておく。

特に、本書がペルトネン研究に強い影響を受けているのは同章第二節である。本書が「古典的ヒューマニズムの語彙を用いることによって地方都市という政治的共同体における「市民」的価値を推奨しながら、自治都市が独自の「コモンウェルス」を形成する過程について詳述した著作」（二七一頁）と指摘して、バーストンの史料を用いているように、ペルトネンもまさに同様な点を『古典的人文主義』の中で記しバーストンの史料を用いている。しかも本書（一七一一―一八二頁）とペルトネンの『古典的人文主義』（pp.59-72）は、バーストンの史料の引用含めて論述方法及び注記が酷似している。また、同節で用いているジョ

ン・ストックウッド、リチャード・マルカスター、ウィリアム・ケンプの史料（二七七八頁）もペルトネンの他の論文（論文集『初期近代イングラントの君主政共和国』所収、pp.109-112）と重なる部分が多い。このように、問題点①抽象的な道徳論の傾向及び②宮廷外の政治的領域に関する考察の不足について、ペルトネンによる先行研究を批判し論証を試みている本書の論述方法は、批判されている先行研究の論述方法と重なる部分が多く、著者が指摘するこれらの問題点は適切ではなく、本書はその問題点を克服できているとはいえない。

著者がこうした問題点を指摘した背景には、おそらく本書が第四章第三節で丁寧論じているスタップズの政治的活動に見られる「公共圏」について、ペルトネンが一九九五年出版の『古典的人文主義』で言及していないからであろうと推察する。しかし、ペルトネンがこの時点で「公共圏」の議論について言及していないことは批判として適切ではない。というのは、著者も記しているように、スタップス著『亡国論』の「公共圏」に関する議論は、ペルトネンの研究書が出版されてから約十年後に出版したN・ミアズの一連の研究成果である。実際、その後刊行されたペルトネンの論文（論文集『初期近代イングラントの君主政共和国』所収）には、エリザベス期の「公共圏」におけ

る政治的意識としてミアズの研究成果について言及されている。ここで問題なのは、むしろ、本書が政治的意識の実践というこのミアズの新たな研究動向について、第三節冒頭（一八五―一六頁）で指摘するに止まり、序章の先行研究の整理の箇所で言及していないことであるといえよう。また、本節の論述方法は、ミアズの研究成果のそれと重なる部分が多い点も付言しておく。

この先行研究の整理と関連して、全般的にリパブリカニズムの先行研究の整理方法について改善の余地があるといえる。本書は、豊富な二次文献を参照しながらも重要な先行研究について注記に止まっている（一八頁、注三一）。従って、本書の特徴である先行研究の簡潔な整理が、議論の幅をかえって狭めてしまったといえよう。本書の先行研究の整理において言及されていないが、地方・都市レベルでの政治的イングランド意識の社会的広がりについて Phil Withington, *The Politics of Commonwealth: Citizens and Freemen in Early Modern England*, Cambridge Univ. press, 2005 も加えると、先行研究に対する本書の位置付けがより鮮明になり、議論の幅が広がったのではないだろうか。

問題点③エリザベス期の「リパブリカニズム」の極度の単純化について、本書は論文集『初期近代イングランド

の君主政共和国』を取り上げ、「エリザベス期の宮廷外の政治的領域に関する考察が未だに不十分であることを露呈し」、他の先行研究含めて「エリザベス期の「リパブリカニズム」を極度に単純化」（七頁）していると批判する。ここで著者は政治的領域及び思潮の単純化という二つの側面を批判している。しかし、著者の言うこの解釈が適切であるのか疑問が残る。

政治的領域の単純化について、確かに、本書七頁で指摘されているように、論文集の最後に寄稿したコリンソン自身がエリザベス期の都市に関して十分な考察をしてこなかったことを認め、そういう意味でこの論文集にも「都市という次元」の視点が欠けていると書いている（論文集、pp.251-8）。それに対し論文集の編者は、二つの論文が「都市次元」について取り扱っているが、それだけでは十分ではなかったと言及している（論文集、p.10）。ここで編者が意味していることは、コリンソンが言うように地方の視点が論文集に無いのではなく、その「都市次元」のテーマを扱う論文数が少ないことを示唆していると評者は理解した。実際、論文集の中の一つの論文はエリザベス期に見られた二つのリパブリカニズム（国、都市次元）について論じている。しかも、この論文は、著者がペルトネンの研究に対して指摘した批判、すなわち宮廷と宮廷外の政治的領

域を無関係のものと捉えている点（八頁）について克服しようとしたものである。また、先述したように、本書が挙げた問題点②に関連する宮廷外のリパブリカニズムについて、ペルトネンがこの論文集に寄稿した論文と本書第四章は史料の引用含め論述方法の点で重なる部分が多い。

さらに、この論文集には本書の論旨と共有可能な内容を含む論文も少なくない。例えば、この論文集には、本書第五章（二五九頁）で言及しているホイットギフトとカートライト論争について考察し、宗教と政治の関係について考察した論文もある。また、『為政者の鑑』に抵抗権の解釈を見出した論文もあり、本書第五章で扱っている政治的意識の急進化と共有できる王権批判の思想について論じられている。従って、評者には、この論文集は本書の論旨とかなりの程度親和性が見出せると映り、先行研究が政治的領域を単純化しているようには見受けられないし、本書がその点を十分克服しているようには見えない。

次に、エリザベス期の「リパブリカニズム」という思潮の単純化について見てみる。この点を批判した著者は、政治的イングリランド意識の形成（一五五八―一七〇年頃）、発展（一五七〇、八〇年代）、急進化（一五九〇年頃―一六〇三年）という三つの時代区分に分けて一見、非均質的に解釈し論述している。確かにこの時代区分内の設定は

著者の独創的な点であり、本書の論述は明快である。しかし、これに関して主に二点疑問が生じる。第一に、本書が言う三段階の時代区分のように、意識の展開を明確に区別することは可能であろうか。第二に、本書各章各節が考察している意識の事例について「極度に単純化・均質化」されていまいかという疑問である。

第三章で宮廷内プロテスタント人文主義者の政治的イングリランド意識の形成について論証する際、用いられているトマス・スミスの作品（と見なされている）『イングリランド王国の繁栄についての一論』は、一五四九年頃書かれたと推定されており（二二頁）、一五五八―一七〇年頃の時代区分の中で論じることには違和感を覚えた。著者は、貨幣、困い込み、物価についての現実的な政治的諸問題について取り組んだこの作品は「スミスの政治思想の根幹を成している」（二四四頁、注九二）として形成期に取り上げている。しかし、スミスのこの作品は、著者が言う政治的イングリランド意識がむしろ一五五八年以前、すなわち一五四〇年代から形成されていたことを意味しているのではないだろうか。しかも、この作品の重要な点は、言説を文字通りに解釈すれば、宮廷関係者ではなく議員という視点、すなわち宮廷外の議会に身を置く人物という視点（議会という政治的領域という意味で本書第四章に該当）から書かれている。

従って、この作品は、一五四〇年代に宮廷外という立場から政治的意識が形成されていたことを示唆しているといえるのではないだろうか。

同様な点は、本書が政治的イングラント意識の発展期において扱っている下院議員ビータ・ウエントワースによる一五七六年の議会演説に出てくる「言論の自由」に着目した議論にも当てはまる。この演説は、議会におけるエリザベスに対する批判（王権批判）としてもよく知られている。この点を踏まえると、ウエントワースのこの演説は、著者の言う政治的イングラント意識の急進化（一五九〇年頃—一六〇三年）に見られた王権批判とはどのように異なるのだろうか。ウエントワースの言説を考慮すると、一五八〇年代から既に王権批判がみられたと解釈すべきか、そうでないとすると一五八〇年代の王権批判と急進化の時期の王権批判との異なる点を丁寧に論じる必要がある。

著者の言う三段階解釈には他にも疑問が残る。例えば、本書は一五九〇年頃—一六〇三年の政治的意識の急進化の事例として、ピューリタンによる「マープレリト書簡」言説を分析しているが、本書二五九頁で言及しているように一五七〇・八〇年代のグリンダル及びカートライトの言説は、どのような位置付けになるのだろうか。換言すると、彼らの言説を取り上げるとすると、時代区分では第四章の

発展期に該当するが、内容的には急進化の時期に該当するのかわかではない。その一方で、コモンウェルス論について書いてあるトマス・フロイド『完全なコモンウェルス』（一六〇〇年）は、著者の言う急進化の時代区分の中でどのように解釈されるのであろうか。また、本書は政治的意識の急進化の事例として王権批判をした演劇を挙げているが、（宮廷内）演劇と一五八〇年代の「公共圏」との関連はいかなるものであろうか。

以上、本書が掲げた先行研究の問題点に対する本書の論述方法について評した。このように、政治的意識の展開を時系列に沿って区分し解釈すると、扱う史料を広げる際により丁寧に論証する必要がある。

本書は、先行研究の整理の仕方に課題を残しつつも、限られた史料の言説を丁寧に分析し、コモンウェルスという概念・言語を社会の中で検証することに成功している。しかし、イングラント社会全体を描き出すには、今後より多くの史料を用いて論じる必要がある。その際、果たして著者のいう政治的意識の形成・発展・急進化の三段階の時代区分は適切か、また意識の言説が見られた空間について齟齬が生じないか、改めて検証する必要がある。

（防衛大学校人間文化学科准教授）